

もくじ 千ヶ崎悌六水彩画不明工場の描画場所の特定について 1P

千住掃部宿の「旧書留」から⑤宿場役人と冥加永 2P 資料紹介 戦前の小学校改築の写真 4P

# 足立史談

## 第590号

2017年4月15日

足立区教育委員会  
足立史談編集局  
足立区立郷土博物館内  
〒120-0001  
東京都足立区大谷田5-20-1  
TEL 03-3620-9393  
FAX 03-5697-6562  
(28-308)

### 千ヶ崎悌六

#### 水彩画 江村残雪と 不明工場の描画場所の 特定について

鈴木 恒雄



上) 千ヶ崎悌六 「川沿いの工場」

右) 1954 (昭29) 金子寿一氏撮影  
「花畑運河」 東洋農鋳器工場 (橋は雪見橋)  
東洋農鋳器の生産品は、スコップなどの  
農機具製造であった。



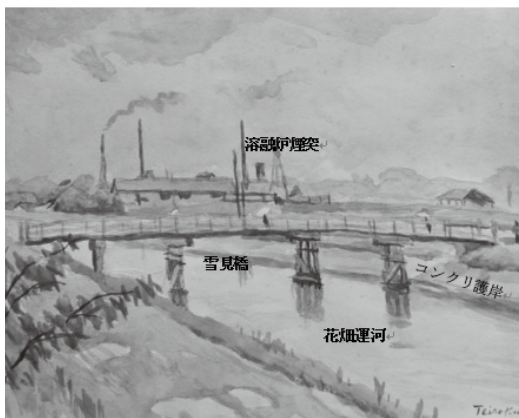
① 「江村残雪」

平成28年度文化遺産調査特別展に  
あたり、郷土博物館から千ヶ崎悌六  
氏の水彩画の描画場所が判らないか  
との照会があり、今回、展示に関係  
した絵画2点の場所を特定したので、  
その経過を報告し、併せて金子寿一  
氏撮影の付近の写真を紹介する。

ここでは、絵画2点、①花畑小学  
校2階図書館からの描画の「江村残  
雪」と②描画場所不明の「川沿いの  
工場」(仮称)について紹介する。

①の「江村残雪」は、昭和29年  
(1954) 週間朝日の1月16日号  
の表紙を飾ったものであり、同紙表  
紙コンクリールの参加作品に選ばれた  
ものである。

同館の展示図録によると、悌六氏  
は、近所の小学校二階を借りて、残  
雪の残る水田風景を描いているとい  
う。しかし、その小学校名までは、  
この記事ではわからなかった。博物



② 「川沿いの工場」(筆者加筆)  
現 辰沼2丁目18にあった旧東洋農鋳器工場

館がその場所の特定をしているとき  
に、ちょうど、私に照会があった。  
私は、悌六氏が「江村残雪」を描い  
た花畑小学校の教室は、本来は図書  
室であったものであることに気がつ  
いた。その頃、児童数が多くなった  
ために、図書室まで教室として、使  
用せざるを得ない状況で、1クラス  
増した5組であった我々は、その図  
書室の教室を1年間、間借していた。  
このときの記憶が、今回、場所を特  
定する決め手であった。当時の地形  
図の読図からも、小学校二階南側の  
花畑の農村風景を描いた「江村残雪」  
の風景は容易に、よみがえってくる。  
遠くに見える風景は、内匠本町の家  
並みで、高い藁葺き屋根は、七面神  
社と想定される。

判らなかつたのは、②の「川沿い  
の工場」である。当初、川と橋と建



③ 1947/07/24 (昭22) 撮影 位置関係図  
東洋農鋳器工場付近 国土変遷アーカイブより

屋の位置関係、当時のランドマークであった煉瓦焼成炉を持つ太い煙突の風景から八潮市大曾根の帝国煉瓦工場と想定していた。しかし、実は八潮市の関係者からは、煙突の数が多すぎる、土手上の道路の幅が広すぎるなどの異論が出されて、遂方に暮れていた。

今回の特別展示にあたり、再度、気を取り直して、昭和12年(1937)の1万分1地形図、昭和21年(1946)の米軍AMSの地形図、昭和22年(1947)の米軍航空写真、昭和35年(1960)の1万分1地形図をもとに再度、描画場所の点検を行ったところ、梯六

氏の勤務する学校近くの花畑運河(現花畑川)の雪見橋南側に太い煙突を持つ炉があることがわかった。溶融炉煙突と雪見橋の位置関係は③図に示してある。

その工場の名称は、東洋農鋳器(現辰沼2丁目18)といい、農機具を作成する会社であった。戦後の航空写真、地形図では、場内に大きな溶融炉建屋と付属する太い煙突が見える。さらに、②の絵の中で、川を特定するのに役立つのは、兩岸を構成する護岸で、当時としては珍しく、ゆるい傾斜で布状に固められていることである。川幅としては、綾瀬川級の広さを持ち、橋と川面の高さはかなりあることも特徴的である。

加えて、この過程でのおまけは、同じく描画場所不明で、今回展示された「膠工場の一隅」の絵で、これが区立十三中学校近くの雪見橋右岸(南側)の須賀製鋳花畑工場で描かれた可能性ができたことである。このようなことから、当時の地図、航空写真を再度見直したところ、梯六氏描画の「川沿いの工場」は、東洋農鋳器であったと結論されたものである。今回は当時の1万分の1の地形図、1万分の1航空写真等をもとに、描画場所を特定したが、それを最終的に、金子寿一氏撮影の当時の周辺の地上写真によって確認することが出来た。  
(博友会会員)

## 宿場役人と冥加永

多田 文夫

千住掃部宿の「旧書留」から⑤

千住宿の役人は町役人や町の有力者が勤めていたことが従来知られているが、「旧書留」では、その変遷について記述している。これまで確認されていなかった事項も多いことから早速紹介してみたい。

### ■ 釈文 1

#### 【①宿場役人】

問屋役往古より八ヶ町名主四人宛隔年二  
(6丁裏)

勤候処、宝曆十三年未年四月、伊奈半左衛門様二而、三丁目庄蔵、中村町弥右衛門兩人江問屋被仰付、夫より式人勤二相成ル、

#### 【②役料と事件】

貫目所金廿五両、八ヶ町年寄役料二相極、老入金三分宛請取候処、寛政四子年、問屋弥右衛門、同八郎兵衛勤役之節、年寄定役相究メ大貫次右衛門様江訴、夫より地方年寄ハ不請取、橋戸年寄弥五右衛門、荒川見廻役勤候処、

#### (6丁裏)

不正之筋有之、大貫次右衛門様にて御吟味中入牢、寛政六年寅十月川廻

役被 召放候、是八年々米式俵三斗  
壹升ツ、被下候、

#### 【③冥加永と運上】

安永元辰年より伊奈半左衛門様二而被仰付候、

永五拾文 真木 冥加永  
舟廻

安永二巳より同断、  
永三百五拾文 醬油絞り 同

安永四未年より同断  
永式貫文 川魚運上

(7丁裏)  
安永四未年より同断  
永式貫文 川原分

天明三卯年より同断  
永壹貫七百五拾文 米問屋

新規  
寛政八辰年より大貫次右衛門様二而  
永四百三文八歩 米問屋

同  
寛政八辰年より同断  
永三貫廿五文六歩 前裁問屋

同  
寛政八辰年より同断  
永三貫三百六拾五文 川原分

同  
寛政八辰年より同断  
永三貫三百六拾五文 前裁問屋廿五人

同  
寛政八辰年より同断  
永三貫三百六拾五文 前裁問屋廿五人

同  
寛政八辰年より同断  
永三貫三百六拾五文 前裁問屋廿五人

同  
寛政八辰年より同断  
永三貫三百六拾五文 前裁問屋廿五人

同  
寛政八辰年より同断  
永三貫三百六拾五文 前裁問屋廿五人

同  
寛政八辰年より同断  
永三貫三百六拾五文 前裁問屋廿五人

川魚問屋六人

■解題8 宿場役人と商業

①宿場役人 千住宿は全体で八ヶ町と称された。千住一丁目から五丁目までの五つ、ここに千住掃部宿(河原町と橋戸町を含む)、小塚原町、中村町を加えた計八つである。この八つの町で四人ずつ二年に一度、宿場役人を勤めたと記している。しかし宝暦十三(一七六三)年に代官伊奈半左衛門忠宥(いなはんざえもんだだおき)が問屋役人を二人体制に変更し、千住三丁目の庄蔵と中村町(南千住)の弥右衛門が勤めたことが記録されている。

なお千住宿の役人の構成は概略次のようになっていた。

【各町】町名主一年寄(複数)  
【宿場】問屋一問屋役人  
※宿場役人は各町の役人から交代で勤める。

こうしたおり橋戸町の年寄弥五右衛門が荒川見廻役をつとめていたとき、不正があったとして代官大貫光豊によって入牢させられ、その後、釈放となる事件が起こった。本資料では、これを契機に川廻役は毎年米を支給されることとなったと記している。この詳細は判然としないが、寛政四(一七九二)年は代官(関東郡代)伊奈氏が失脚した年であり、それまで伊奈氏とつながりが深かった人びとの扱いが変化したことが要因だろうか。

冥加永からみた千住宿の商業

No	年代	商業	冥加永高
1	安永元(1772)年	真木(材木)、舟廻(舟運)	50.0文
2	安永2(1773)年	醤油絞り(醤油製造)	350.0文
3	安永4(1775)年	川魚(川魚)	2000.0文
4		千住河原町分 前裁(青果問屋)	2000.0文
5	天明3(1783)年	米(米穀問屋)	1750.0文
6	寛政8(1796)年	米(米穀問屋)新規	403.8文
7		前裁(青果問屋) 62軒	3025.6文
8		前裁(青果問屋) 千住河原町 25人	3365.0文
9		川魚問屋 6人 千住河原町分	1500.0文

立風土記』①など)、その後の商業の変遷は断片的であった。この記載からみると安永年間に材木、舟運、醤油、さらに川魚、前裁の各問屋が発展している。とくに川魚と前裁は永高が大きく、当初の商業発展の中心だったと思しい。

大きく変化したのは寛政八(一七九六)年である。従来、把握されていた様々な問屋のうち米穀、前裁、川魚の各問屋の冥加永が賦課されている。米穀問屋については天明三(一七八三)年に冥加永が賦課されたあと、この年に追加され、さらに前裁問屋は計八十七軒にのぼり合計で六貫文(六〇〇〇文)を超える冥加永を上納している。前裁問屋というと千住河原町の「やっちゃ場」を連想するが、この段階では河原町は二十五、他の千住宿で六十二軒と千住河原町以外にも多くの前裁問屋が分布していた。

- 積文2 \* \* \*
- 【③駄賃銭】(7丁裏つゞき) 千住より江戸迄
  - 人足者人 賃錢四拾六文
  - 本馬者定 同 九拾壹文
  - 軽尻者定 同 六拾文
  - 駕籠者挺 同 百八拾八文
  - 草加宿式里八町 四拾三文
  - 人足者人 八拾四文
  - 本馬者定 (8丁表) 五拾六文
  - 軽尻者定

駕籠老挺 百七拾六文

新宿迄老里半

人足老人 貳拾八文

本馬老疋 五拾五文

軽尻老疋 三拾六文

駕籠 百拾六文

舍人・大原迄

人足老人 (無記載)

本馬老疋 七拾五文

(〇丁裏)

軽尻老挺 五拾貳文

駕籠 (無記載)

人足老人持 五貫目

本馬乗下 貳拾四貫目

軽尻乗下 五貫目より八貫目迄

駄荷物 三拾六貫目より

長持老棹 四拾貫目迄

三拾六貫目六人持

③ 駄賃銭 宿場間の輸送に関する

公定賃銭について記された部分で

ある。末尾に、その輸送力の概要

が記されている。人足は一人五貫

目(一八・七五kg)までの荷物を輸

送。本馬(ほんま)は荷馬のことで

二四貫目(九〇kg)までの積載、軽

尻(からじり)も荷馬で五〜八貫目

(二八・七五kg〜三〇kg)の積載が規

定重量であった。ほかに駄荷物輸送

の規模も入っていたり、長持での輸

送も記述されている。

こうした輸送の運賃であるが、江

戸時代後期の一般換算数値(一文≒約二〇円)で見ると人足賃は次の料金になる。

【人足の荷物運送賃】

江戸(馬喰町) 四六文 九二〇円

草加宿 四三文 八六〇円

新宿(葛飾) 二八文 五六〇円

江戸時代は人件費が安いと言われる。草加までの賃金を見ると、一八

kgほどの荷物を八・七kmも運ぶのに

八六〇円である。現代の観点から見

れば大変な低賃金と見えてしまう。

宿駅制度は次の宿まで輸送してい

く駅伝方式であった。例えば粕壁宿

(現春日部)に輸送したい人は、千

住宿から草加宿まで運んでもらい、

さらに草加宿の人足に積み替えても

らい、さらに粕壁宿まで運ぶとい

段取りになる。

人足は草加宿まで荷物を運び、帰

りに荷主があれば、その駄賃銭を稼

いで戻ってきた。荷主が見つからな

ければ、文字通り「無駄」になっ

てしまった。宿駅制度に基づく言葉は、

この他にもあり、宿場と宿場の輸送

行程のことは「丁場」といい、輸送

行程が長いことを「長丁場」とい

った。いま暮らしの中で「無駄」や「長

丁場」の語源に当たることは稀であ

った。当時は非常に身近な言葉で

あった。

(郷土博物館学芸員)

つづく

資料紹介

鞍前の小学校改築の写真

郷土博物館で現在開催中の「千ヶ崎悌六展」(〜五月二十一日まで)

にあわせて二枚の写真絵葉書が区内

個人の方から寄贈されました。

その一つが左に掲げた「東京市花

畑尋常高等小学校改築校舎」と題し

た写真を掲載する葉書です。昭和

十三(一九三八)年に現在の花畑小

学校は「西側校舎」の改築を行った

ことから、当時の改築しようすを

写した写真であろうと推測できま

す。

さっそく花畑小学校のOBで郷

土博物館ボランティアの鈴木恒雄

さんに確認したところ昭和十六

(一九四一)年から国民学校となる

前であることから、昭和

十三年のことと推定できる

とのことでした。鈴木さん

も、この校舎で学んだそう

です。さらに、この校舎の

二階には図書室があり(写真

真左上)、「千ヶ崎悌六先生

は、今回のこの南側窓から

展覧会に出品されている

『江村残雪』の絵を描いて

いました。

この木造校舎は終戦後も

花畑小学校の校舎として昭

和三十八(一九六三)年ま

で使用されたとのこと

です。作品「江村残雪」とあ

わせて見ること、豊かな

農村地帯にあった、すつき

りとした木造校舎をイメー

ジでき、往時の花畑の情景

がよみがえってきます。

(郷土博物館)



舎校築改校學小等高常尋畑花市京東